



墨田区における 水害の危険性とその備え

近年、気候変動の影響と考えら

れる集中豪雨や巨大台風による水害が頻発しています。墨田区は過去に関東大震災や空襲による惨事を経験し、防災に対する意識が高い区として知られています。しかし、これまでの災害対策は、地震、火災への対応が主流でした。墨田区も水害の脅威にさらされています。今後は、水害に対する備えにも力を注いでいく必要があります。

まず、昨年6月に墨田区が各世帯に配布した新しい「水害ハザードマップ」の内容を確認してください。手元をお持ちでない場合は、区役所(都市整備課)、各出張所のほか、ウェブサイトで入手できます。

水害には大きく2つの種類があります。一つは内水氾濫(雨水出水)と呼ばれるもので、集中豪雨によって雨水の量が下水の処理能力を超えてしまい、水が地表に溢れ出て生じるタイプの水害です。もう一つは外水氾濫と呼ばれるもので、長時間の集中豪雨、高潮などによって河川堤防や防潮堤の決壊あるいは越流が生じ、大量の水が市街地に流れ込んで生じるタイ

プの水害です。

内水氾濫の場合は、浸水深は外水氾濫のように深くなりませんが、急激に水位が上がります。水が30センチくらいの深さになると、歩行が困難になります。地下室や車のドアが水圧で開かなくなり、歩行が困難になります。地下室や車のアンダーパスなどが特に危険な場所になります。また、床上浸水となる場合、建物や設備の被害が大きくなります。内水氾濫に対する備えの基本は、大雨情報に注意をして危険な場所に近づかないことです。建物や設備の被害を防ぐためには、土のうを活用するほか、止水板を設置する、床高を上げる、設備の高さを上げるなどの対策が効果的です。被害を受けた際は、水害保険に加入していると再建がスムーズです。

外水氾濫についてはどうでしょう。隅田川は、荒川の分岐点である岩淵の水門で水位を制御していますので、外水氾濫の危険性は低いといえます。しかし、荒川の増水、東京湾の高潮により堤防が決壊して外水氾濫になる可能性は否定できません。墨田区は地盤面

が海抜より低いいため、特に区の北部・東部では想定浸水深が3m以上となる地域が多く、建物の3階以上でないと水に浸かってしまいます。電気、上下水道、ガスなどのインフラも使えなくなります。浸水した水はポンプで排水しますが、水深50センチ以上の状態が2週間以上継続すると想定されています。

外水氾濫への備えは、氾濫発生前に区外の安全な場所に避難することが原則です。どうしても避難が間に合わなかった場合は、近隣の高い建物に避難をして救助を待つこととなります。大型台風の到来の際は、氾濫が想定される1日前に広域避難勧告が発令されることになっています。ただし、行政からの情報を待つだけでなく、自らが情報を取りにいき、自ら判断することも重要です。今日では、インターネットを通じて様々な情報入手できます。スマートフォンなどで天気予報を見る際に、台風の進路予想を見ている人も多いと思います。ネット検索で、「荒川、河川水位」と入力し、国土交通省・荒川下流河川事務所の「水位・雨量・ライブ映像」のページを見つけてください。荒川の水位が「避難判断水位」に達しているかどうかなどの情報を即時に得ることができま

また、自分自身と家族の安全確保(自助)が最優先ですが、さらに、近隣の高齢者世帯など、自力避難が困難な方々(要配慮者)への対策を地域全体として検討すること(共助)も必要です。

外水氾濫をもたらすような大雨が発生する場合、氾濫の有無にかかわらず、小旅行でもするつもりで安全な場所に早めに移動することが一番の対策です。

(芝浦工業大学

システム理工学部教授

中村 仁)

※平成30年度後期すみだ地域学セミナー講演(9月22日)より



墨田区の市街地と荒川(写真の右側) ※ヘリコプターから撮影

法泉寺の 紙本着色涅槃図

法泉寺(東向島3・8・1)は、源頼朝の御家人葛西清重の両親の菩提を弔うために創建されたと伝えられる寺院で(寺伝)、境内には江戸時代に造立された石仏や石碑が立ち並んでいます。今回は、法泉寺に伝来した「紙本着色涅槃図」(通常非公開)を紹介します。

涅槃図とは、仏教を開いた釈迦が亡くなる時の様子を描いた仏画です。多くの寺院では、釈迦の命日とされる2月(もしくは3月)15日に懸架し、「涅槃会」と称する法要が行われています。

法泉寺の涅槃図は制作者不明ですが、箱書(後述)から江戸時代(18世紀前期頃)の制作と考えられています。画面寸法は、縦221・0センチ、横は188・0センチ(表装部分まで含めると縦310・0センチ、横218・2センチ)で、大変大きな仏画です。画面上部中央には満月、右手には飛雲に乗り駆けつける摩耶夫人(釈迦の生母)が描かれ、背後にインド北部クシナガラを流れる跋提河を、中央には、沙羅双樹の下で左側面を見せて宝台に横たわる釈迦が配されています。釈迦の周囲には、多くの仏弟子や菩薩、天部、諸神、釈迦を慕う人々が集まっています。嘆き悲しむ者たちの表情が細やかに描

かれ、人々の悲しむ声が聞こえてくるような迫真の描写となっています。画面下部には参集した伝説上の生き物や様々な動物達もみえ、あらゆる生命が釈迦の最期に立ち会った様子を表現しています。

こうした画

面構成は、鎌倉時代以降に制作された涅槃図に多く見られます。丁寧に描かれた人物の表情や様々な図様からは、制作者が豊富で良質な絵画情報に接し得る環境で種々の絵画技法を体得していたと推測されます。本図は仏画らしい平面的な美しさに加え、全体の調和に配慮した細やかな筆遣いにより、釈迦臨終の荘厳な様子をより印象深くしています。

なおこの涅槃図には、文様や図柄を描き込む描表装が施されています。劣化が進行すると、描表装は本図と切り離される場合がありますが、近年の修理の際にも過



去の大幅な改変、補筆の痕跡は確認されていません。描表装と本図が一体的に伝来することは珍しく、貴重な事例といえます。

本図が保管されていた木製収納箱の蓋には、江戸時代(18世紀)の法泉寺六世住持であった大超(澄)智溟による墨書があります。これによれば、本図は宝泉寺(当時牛込横寺町、現在は中野区に所在)八世住持青峰曇芝により寄付され、法泉寺の什物になったとあります。また、境内に立つ享保20年(1735)銘の石塔「法華経一千部供養塔」には、大超(澄)智溟が青峰曇芝の弟子であることが刻ま

れており、涅槃図伝来の背景の一端がうかがわれます。

本図は墨田区内では数少ない江戸時代制作の仏画であり、平成30年に墨田区登録文化財に登録されました。

法泉寺では、2月15日に涅槃会が行われ、本堂にこの涅槃図が懸架されます。参拝者は拝観することができしますので、足を運んでみてはいかがでしょうか。

(墨田区文化財保護指導員

武藤 健作)